
銀色妄想

紫叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色妄想

【Nコード】

N9860M

【作者名】

紫叉

【あらすじ】

銀魂BL短…中編集
だと言ってやるッw

銀さん、沖田中心になる予定

好きなんですこの2人w

全部作者の妄想です

作者は変態です

内容に響きます↑

※文才は悲しいレベルです↑

気に入って頂けるのが一番ですが

とりあえず観覧頂けたら

嬉しいです(＊＾ω＾＊)

誤字・脱字

申し訳ありませんが

ご指摘願います…。

随時リクエスト受付中

はじめまして

まアお決まりだよね

一応ザーツと目を通していただければ、と。

はじめまして

紫叉 ― シシャ ―

と言いますw

死者じゃないよ!?

縁起悪いとか言わないでね? ↑うるさい

たまに矢印からのツツコミがありますが
気にしないでください。

腐女子に目覚めた頃から
授業中、裏紙に妄想を（痛々しいけど）
書き殴っていたんですが

それらを皆さんにお見せしようかな…と。

文才に恵まれないくせに
こんな事したがっちゃって

すみませんw↑

謝るくらいなら

こんな事すんな

つつー話ですけど

そこは目を瞑ってくださいw

皆様の妄想力で

銀色妄想に色をつけてください／（＾O＾）／

それじゃあ

つまらない話はこの辺で…

本編…どうぞ（・ω・）

たいとる？ (前書き)

銀山

銀沖じゃないの？
ってツツコミは受け付けませんw

たいとる？

「よォジミー君。何してんの？仕事？」

「…………山崎です。仕事中ですよ。密偵の任務が入ってまして…」

午後、監察の仕事中。

現場へ向かっている途中に、万事屋の旦那と一緒に居た神楽ちゃんに会った。

今日は副長の機嫌があんまり良くないみたいだから、さっさと終わらせて仕事の報告をしたい所だったのに俺ってば…

「……………！！」

…言っちゃったよね？今密偵の仕事って言ったよね俺、と。いや、大丈夫だ、そんなに気にする事じゃあない、と少し焦りつつも2人の方を見ると

「ジミー馬鹿アルか？そーいうのは秘密にするのが当たり前アル。私がコレ他の人にバラしたら、お前クビアルなW ぷぷっ」

と、ニヤニヤしながら俺を見てくる神楽ちゃん。

「ええっ、ちょっ、それは勘弁して下さいよ」

ただでさえ副長はご機嫌斜めだと言うのに。

これ以上機嫌を損ねたら俺はどれだけ叱られれば済むだろうか？それにいくら仕事内容が軽いとは言え、仕事は仕事だ。ちゃんと任務遂行しなければ。

…自分で首を締めたのだが。しかし…

「嫌アルwん…、何してもらおうかな…♪罰ゲームは…」

「ああ神楽、ジミー君へのお仕置きは銀さん「ああ神楽、ジミー君へのお仕置きは銀さんが考えとくから。お前、ちょっと遊んで来い。」

「何でヨ！！私もイタズラしたいアル！！」

俺の存在を無視して2人で言い争っている。

俺、何やってんだろ…仕事が…。

旦那は宥めようとしてくれているが神楽ちゃんは譲る様子がない。行ってしまおうかと悩んでいたら

「じゃあコレで酔昆布買ってきていーから」

万事屋の旦那が神楽ちゃんにお金を渡す。

お？これはもしかして…

「マジでか！！銀ちゃん太っ腹ネ！！行って来るアルよ」

「おー、気を付けてな。あ、知らねー奴についてっちゃ駄目だぞ。お前を捕まえた奴らが怪我すっからw正当防衛の域越えちゃうから」

旦那は手を振り、神楽ちゃんは走って行ってしまった。万事屋の旦那…俺を助ける為にわざわざ…

「ありがとうございます！！少し見直しましたっ！それじゃあ俺…行きますね。」

助かった。あの子には勝てそうになかったから、旦那が気を使ってくれたみたいだ。

でももうそろそろ行かなければ。

そう思いお礼を言って旦那の横を通って行こうとすると

「何言ってるの？誰もジミー君の事助けた訳じゃねえよ。」

そして手首を掴まれ、路地裏へと引つ張られる。

「へ？あつ、ちよつ…と…っ」

「神樂にあんだけあげちゃったんだから…その分。」

旦那は俺の手首を壁に押し付ける。

「ちよつとぐれーもらっても文句言えねえだろ」

「は…？」

あんなにあげた？

酢昆布代の事だろうか？

でももらうとは何の事だ？

万事屋の旦那が話しかけてこなけりゃ

こんな事にはならなかったと…

とりあえず

「あの…、話が掴めないんですけど…。何をやれと？お金だつたら一応払えますけど、それってただの言いがかりじゃ…」

「ん…、分かってんだろ？それにジミー君なんだから口応えすんなよ」

「何かソレ酷くな……」

真っ直ぐに見つめられ、その後、目の前の視界が暗くなる。

「んッ……」

気付いたら……というか何となく予想はついていたのだが、俺の言葉は最後まで発されないまま万事屋の旦那の唇に吸い込まれてしまった。

「っ……んんゝっ、旦那ッ……」

少しの間固まってしまったが、すぐに顔を背け逃れようとする。

「……………」

それから少しして唇は離れた。

「はあ、っ……、な……何してんですか……頭おかしくなりましたか……」

でももうこれで仕事に戻る。

「じゃあ今度こそ…」

相手を少し見上げるようにしてそう言い、そこから離れ行こうとした時。

「…っと♪んな簡単に返すとも思ったか？」

旦那は顔の横に両手を付いて俺に顔を近付けてくる。今度は予想出来てなくて、ビクツと肩を揺らしてしまった。なんか…ベタだ。そうは思ったけど、これまたベタな反応を見せる俺。

「ッ…近いです旦那…」

居たたまれなくなり下を向く。すると頭の上から低めの相手の事が聞こえる。

「ねえジミー君、何でさ、もっと焦ったりビビったりしねーの？そのすました態度が気に喰わねえんだけど。」

「だったら相手しなけりゃいいじゃないですか。放せばいいじゃないですか。っーか離してください。」

「それは出来ねエな。無理な願いだ。だって……」

「……………」

俺は思わず俯いた。相手が次に言おうとする言葉は何となく予想がついた。

「……それで分かっちゃう所がまた腹立たしいんだよな。でも離せ放せ言う割にゃ逃げようとはしねエよな？…それってちよつとでも銀さんと遊んでみたいっつゝ気があるからじゃねエの？」

ニヤリと笑う万事屋の旦那。

でも残念ながら俺が逃げないのはそんな理由ではなかった。

「違いますよ…アンタさつきから俺の足踏んでんですよ…」

足元を指差してやると、「へ？」と、間拔けた事を出して下を見る旦那。

「あ…悪イ…」

少し焦っている様子で、バツが悪そうに手はそのままだが足だけ退かした。その様子がちょっとだけおかしかった。…と同時に少しシヨックでもある。

「…逃がさないためだとか、わざとじゃなかったんですね…。やっぱり俺地味だから…」

こんな事慣れてる…けど、この状況でのこの台詞は、自分で言っていて何だか虚しくなる。万事屋の旦那がそんなつもりじゃないのだって、ちゃんと分かってはいたが。

「悪かったって…。いやでも本当アレなんだ…俺にとっちゃオメーはま「眩しくて仕方ない、とかですかね」

「なっ…」

驚いているのを見る限り当たったみたいだけど、これは分かった訳じゃなくて、昨日見た深夜ドラマで聞いた台詞だった。

どこまでもベタだな、と思ったけど、足を踏まれていた点、なんか抜けていると思う。

「こんだけやっというて…お世辞にも程がありますよ旦那。」

もう行けない理由もなくなった。するりと腕から抜けると、

「あっ……」

と、本日2度目になる相手の間拔けた声。

「それじゃあ、俺はこれで。」

そろそろ本当に仕事に戻らねば、と、そう言って旦那に背を向け歩き出そうとした瞬間

「待っ…退ッ!!」

「…!!…はい、何でしょう?」

「お世辞なんかじゃねエって事も…
分かってんだろ…?」

俺はそれに対して何も答えず、ただニコツと笑って見せた。

「……失礼します。」

たいとる？（後書き）

———あとがき

なんか要らないなんて言わないのw（殴

あとがかないと、なんか自分が居たたまれません（・ω・）

遂に一作出来上がったやいましたがいかがでしたでしょうか？

お気に召しましたか？

ちょうど受験勉強やらなんやらで忙しい頃に現実逃避の為に書いた
痛作。

いやア痛々しいw

なんで始めっからこんなに

悲しい感じに

しちゃったんだろうか…↑知るか

ま、書き直すつもりは

ありませんけどね！！↑

ちなみに、ジミー君も少し銀さんに
気があったりする（笑

こんなオマケがあります。

…いきなり下の名前を呼ばれたからとは言え、少しばかりでもドキッとした俺はおかしいですか？

万事屋の旦那は気付いてなくても、俺、キスされてる時、実は心臓が…すごい事になってました。

旦那は俺がこんな事思ってるの知らないだろうから、また俺が驚かせてあげますよ。

俺は地味だから、地味な俺が告白なんてしたら、今度はすごく驚くんじゃないかな？

まア、待っててくださいいよw

…ははは

オマケさえもが痛々しい

百も承知ですけどね！！↑ウザイ

気があるのは
少しどころじゃなかったね、うんW↑

アレですよ、
コレの所為で胸くそ悪くなくても
見ちまった貴方の責任ですからね!!↑

苦情は貴方様の胸の内になってしまう
若しくはカラオケで発散してください!!

ま…
お優しい方は
お付き合いくださいませ（＼＼＊）↑

依頼…じゃなくてもいいですか？（前書き）

沖↓銀

依頼…じゃなくてもいいですか？

「あっ…んっ……」

いつからだろうか。

俺がこんな風に沖田くんを抱かれるようになったのは――

もう長い間体だけの関係を持ってきたけど、初めはそれはそれは酷いものだった。

夜、俺が万事屋のソファで一人で休んでいた時

ーピンポーン

…と呼び鈴が鳴るわけでもなく、ガラガラと音がしたかと思えば、少ししてズカズカと立ち入って来る足音。

アレ？新八と神楽は今日は新八ンとここに泊まりに行ってたはずだ。帰ってくる事にしたのか？だとしてもこんな遅くに神楽一人で歩くのを許す筈はない。

誰だろうか？結構遅い時間なのに。

というより俺はこんなのにのんびりで大丈夫か？

もしかしたら銀さんを襲いに来たのか？

キヤー恐ろしい、なんて考えていたら

「なーんだ、沖田くんじゃん」

姿を見せた不法進入者は真選組の彼だった。

「どしたの、こんな時間に。」

「……………」

何だかいつもと様子が違う沖田くん。

訝しげに見つめると、おもむろに内ポケットから茶色い封筒を取り出しドサツとテーブルに放った。

それはジャンプとかエロ本くらいのぶ厚さで、封筒はパンパンに膨れている。

「何？ソレ。」

封筒を手に取り中身を見る。

「えっ…………何コレ…」

それは札幌だった。
俺が驚いているのも構わず、

「ちょっといいですかイ」

俺の目の前に立つと、ガバツと覆い被さるようにソファ―へと俺を押し倒してきた。

「うわっ…ちよっ…」

オイオイ冗談はよせよ、と言ってやる暇もなく、呆気なく逮捕…のように手錠をかけられてしまった。

―…何がしたい？

逮捕される覚えはないし、というか多分これは逮捕の意ではない。相手の意図が全く掴めないまま、沖田くんは黙って真っ直ぐ俺を見下ろしているだけだった。

「なあ、おふざけはこの辺でやめとこうぜ？…だいたいアレだぞ、不法進入だぞw」

と、少なからずある気まずさを誤魔化す為にもわざとらしくちゃらけた口調で言う、返事が帰ってくるどころか口も開かれない。これじゃどうしようもないので、あのさ、と話しかけようとする唇を塞がれる。おふざけにしては度が過ぎるし、お遊びにしてはあんな大金…手が込み過ぎていた。まあ彼なら有り得ない事もないのだが、何よりあの真っ直ぐな目を見て、ああ、これは冗談なんかじゃあないんだな、と何となく軽く察した。

……だが察したとはいえ唇は塞がれたままだ。少し息苦しさを感
じ始め、

「んう……っ」

と、わざと苦しそうに唸りを上げると、少ししてから唇が離された。
俺にはまだ相手の意図が掴めなかった。

――…何なんだ？

あっさりとこんな体勢にさせられた俺が悪いって事か？情けないっ
てか？だいたい、生憎俺に組み敷かれる趣味なんてない。しかも年
下。しかも男。ついでに警察。

反抗するには十分過ぎる理由だった。

「ねえ、何のつもり？ さすがの俺もこのままやられっぱなしは御免
だぜ？」

大人の余裕ってヤツを見せてやりたい気持ちもなくはなかったが、
ここで沖田くんに付き合ってやるのはそれとは違うと思ったので、

少し苛ついた感じで尋ねた。

「…アンタに文句言う権利はありやせんぜ」

「はぁ？」

「依頼です。俺アこの時間アンタを買いやした。あの金全部依頼料にするから…ちよつとの間俺に付き合ってください」

正直イラッときたが、その後の発言は呆氣にとられた。沖田くんらしいっちゃん沖田くんらしい…。もう呆氣にとられて何も言えないでいると、服を剥がれ下着を脱がされ好き勝手犯された。

襲われるなんてふざけて考えていた事が現実となり、本当にふざけてんのは俺かとも思ったが、やっぱりこんなオッサンを抱こうなんて考える沖田くんもなかなかふざけている。まあ…付き合つてと言われた時点で何となくこうなる予想はついていたけど――

「あああッ…やめっ…んああっ」

…ここまで激しく抱かれる予想までは出来なかった。…一時的な好奇心でも湧いてしまったんだろう、仕方ない付き合い合ってるかと、軽い気持ちでこの行為に至る事を許した少し前の俺を悔いた。俺が何度達しても、何度

「もうやめてくれ」

と訴えても、沖田くんは止める事なく、寧ろどんどん激しさが増していくばかり。止めさせようにも手の自由は奪われていたし、体を振ろうとしてもソファーに体が埋まるだけで、結局俺は気を失うまで犯され続けた。――――

これが沖田くんと体の関係のはじまりだった。別に男とああいふ事になるのが初めてだった訳ではない。とはいえ若い沖田くんの性欲に応えられる程俺は若くも、特別盛ってもいなかった。

その日以来、俺は何度も抱かれた。抱かれる場所はいろいろだった。断る事だって出来たけど、それはしなかった。

何故ならただ、沖田くんは上手過ぎたからだ。何処で誰とあんな事覚えてくるのかなんて知らないし…、もしかしたら俺が感じ易かったのかも知れない。分かるのは、俺がちゃっかり感じちゃってたっつゝ事。

一時的な好奇心に付き合ってやる

筈だったのに一時的ではなく沖田くんは月に何度か俺を抱きに…依頼しに来て、その度に一番初めの額程ではないものの、

「依頼料だ」

と言ってお金を持って来た。
ある時、

「俺も感じてんだから」

と言って断ってはみたが、それは続けられた。
そして、沖田くんは必ず俺を抱く時に俺の手の自由を奪った。その
行動が何を意味しているかは分からなかったが、『依頼』だから深
く考えないようにした。
ただ、何度も抱かれるうちに、心のどこかで

「他の奴も抱いてるんだろうか」

と思うようになった。
そんなある日。

その日も、一番初めに抱かれた時と同じで、神楽が道場に泊まりに

行っていて俺一人だった。

今回はピンポーンの音が聞こえ、

「多分沖田くんだろう」

と思いながら出た。それ程回数を重ねた事を表していた。

「おお、沖田くん」

わざとらしく相手の名前を呼ぶと、

「こんばんは。お邪魔しやすぜ。メガネとチャイナ、居ねエんだろイ？」

そう言って中に入って行く。俺一人なのは知っていたらしい。聞いたんだろうか？

まあその後言うまでもなく行為に及ぶのだが、今回はいつもと違った。

『依頼料』

がないのだ。いや、欲しい訳ではないが。

それと、いつもする手の拘束がなかった。その2つは、今まで一度も欠かされた事が無かったので、少し不思議に思ったけど気にしない事にした。

でも、それだけじゃなかった。少し乱暴気味だった行為が、今日は優しく、丁寧過ぎる程に感じられた。

「沖田くんは俺の服をゆっくり脱がしていくのだが、いつもはサツと、何でもない事のように済まされてもうすっかり馴れてしまったそれが、少し恥ずかしく感じられる。」

そして俺自身を握ると、服を脱がすと同様、ゆっくりと扱っていく。

「あっ…はぁ…あん…」

ゆっくりだけど先端も弄られ、確実に快感を与えられて、小さく声を漏らす俺。

「んぁぁあっ…！」

「」
徐々に早く扱かれると呆気なく達して白濁を吐き出してしまふ。

そして、沖田くんは俺の後ろに白濁を塗り付け、指を入れ中を解し始めた。だがいつもはある程度で終わるのに、しつこい程に後ろを弄られる。ただ、やっぱり俺のいい所は知りつくしているらしく的確に弱い部分を刺激してくる。

「んッ…ひぁっ…あ…ッ！」

でもあまりにも丁寧過ぎる。じれったくなって俺は沖田くんを求めてしまった。

「ね…沖田くん…もういいから…早く…挿れてくんない…？」

「駄目でさア、ちゃんと慣らさねエと、痛いでしょ…？」

俺から沖田くんを求めたのははじめてだったけど、こんな優しい事を言われたのははじめてだ。

挿れて、と。

そう言ったのに、沖田くんが挿れてくれたのはそれからまた暫く後ろを弄ってからで。

やっとの事で沖田くんが俺の中に入ってからも、またじれったい程優しかった。というより、今まで俺は激しく抱かれ過ぎたらしい。今日は痛みを感じなかった。

「あっあっ…沖…田くん…っ」

じれったかったけど感じているのは確かで、

「んあっ…っ…ッ」

俺はまたちゃっかり果てた。

それからだ。

いつもなら何ラウンドもするのに、今日は次にいく様子がなく、沖田くんは俺を見つめている。

「はあ…はあ…沖田くん…?」

何も言わず見つめるだけの相手と、いつもと違う様子に思わず声をかける。

するところ切り出された。

「銀時：聞いて欲しい話があるんでさア…」

え？このままで？

とは言わず繋がったままで訊いた。

名前を呼ばれたのははじめてだった。

「ん…何…？」

「俺…アンタが」

『銀時が好きなんです
アンタと付き合いたい。』

と、耳元で囁くように告白される。

「返事は今くだせエ…。遠慮しなくていいですから。…ただ、駄目
だったら…今日も依頼って事で」

繋がったままっつーのが沖田くんらしいと思ったが、自信なさげに付け足されたその言葉は沖田くんらしくなかった。

：俺の返事がYESだったらこれは愛のある行為だと。俺の返事がNOだったら今まで通り体だけだと。つまりはそーいう事だ。沖田くんが不安になる必要はなかった。俺の返事はすでに決まっていたから。

だけど…こんなオッサンでいいのだろうか？そりゃ…告白されたのは嬉しいけど…

でも沖田くんは遠慮するなっつたから…俺は遠慮しないぜ。

俺は初めて自由に動かせた腕を沖田くんの首に回し、相手を引き寄せキスをした。それが返事だった。唇を離し、相手をちゃんと見つめて伝えてやる。

「俺も好きだよ…総悟」

身体だけでなく、心も繋がった瞬間だった。

――
終われ

依頼…じゃなくてもいいですか？（後書き）

———あとかき

ってもう要らなくね？

だって全部痛々しいんですもの W↑殴

…どうでした？

書いて思ったけど

くどい書き回しですよね…

さっきおっきーはやられてればいい

なんてほざいときながら

やらせてしまった… W↑

そして残念だっ…↑いつもだ

まアそれでも

これからも

妄想に励むんで

よろしくお願いしますっ W W

因みにいつか

これの沖田君サイドも

書きたいと思ってます（ゝ・ω・ゝ）↑いい

御覧

ありがとうございました（＊＾ω＾＊）！！

これからも

土沖

沖田くん死ネタ

カチャ———

病室のドアを開ける

「土方さん…?」

俺は今日、今呼ばれた名前の奴に頼まれて沖田くんのお見舞いに来た。

「今日はどうしても仕事があって総悟のところに行けねエ。だから万事屋のお前に頼む。総悟の見舞いに行って欲しい。」
と。

「金は要らねエよ」

と返事した。

沖田くんが入院したと聞いた時は

正直驚いた。

だってよオ：昨日まで俺に減らず口たたいてたくせに急に入院だなんて。

聞いたその日に病院へ行ったけど沖田くんは

「へへ、すいやせんねエ旦那。わざわざ来てもらって。氣イ遣わせちまったなア。」

と バツが悪そうに言っていた。

「なんだ、元氣そうじゃねエか。ビックリしちゃったよ銀さん。死んじやうのかと思った。」

なんてふざけて言ったけど、もしかしたらソレは現実に起こるかもしれない…

1週間おきくらいに沖田くんに会いに行くけど、会う度に痩せていく沖田くんが悲しかった。

……土方君は毎日行ってたみたいだけど。

「土方さん…?」

2回目のその言葉でハツとし、ベッドの横のイスに腰掛ける。さっきまで眠っていたのか、目を開けるのもキツイのか、沖田くんは目を瞑ったままだった。

「何で喋らねエんですかイ…」

…そんな事言われても…

沖田くんは俺のこと土方君だと思ってんのに…

期待裏切っちゃうじゃん。ずっと待ってたんだろ…? 返事の代わりに俺は沖田くんの頭を撫でた。すると沖田くんは僅かに微笑み…また顔を戻す。

暖かい日射しに包まれた病室に

お見舞いの花

そして沖田くんの小さな微笑み…

まるでマンガの最期のシーンみたいじゃねエか

なんて縁起でもない事を

思い浮かべてたけど

何だか今日はいつもと違う…

コレが本当になりそうな気がしてならない

そんな最悪な事を考えていたら、沖田くんはか細い声で

「土方さん…?」

2回目のその言葉でハッと、ベッドの横のイスに腰掛ける。さっきまで眠っていたのか、目を開けるのもキツイのか、沖田くんは目を瞑ったままだった。

「何で喋らねエんですかィ…」

……そんな事言われても…

沖田くんは俺のこと土方君だと思ってんのに…期待裏切っちゃうじゃん。ずっと待ってたんだろ…?返事の代わりに俺は沖田くんの頭を撫でた。すると沖田くんは僅かに微笑み…また顔を戻す。

暖かい日射しに包まれた病室に
お見舞いの花

そして沖田くんの小さな微笑み…

まるでマンガの最期のシーンみたいじゃねエかなんて縁起でもない事を

思い浮かべてたけど

何だか今日はいつもと違う：

コレが本当になりそうな気がしてならない

そんな最悪な事を考えていたら、沖田くんはか細い声で

「あのね、土方さん…
俺…もうダメみたいなんでさア……」

「はッ!？何言って…」

思わず声を出してしまったけど、沖田くんは幸い気付いてないらしい。

「なんか分かるんでさア…。俺…今日で終わるんじゃないかな…。
はは…病氣治すって言ったのに…こんな事になっちゃって…こんな
姿…アンタだけには…見せたくありませんでしたぜ…。はあ…俺…
もっと土方さんと一緒に居たかったなア…。アンタはムカつくし氣
に喰わねェけど…。俺ア…アンタが好きでしたぜ…本当に…アンタ
と一緒に居れて嬉しかった。アンタに好きだって言ってもらえて幸

せだった。俺ア：死んでも悔いはねエかな…。あ、最後にキスしたかったかも。ははっ、冗談でさア：」

なんて涙を流しながら話す。

なんでこんな時に土方君は仕事なんか：何弱気な事言ってるだよ沖田くん：

オメーらしくねエよ：

って思うのに、俺には分かる…。

いくつもの戦をやってきた俺は、仲間の死に際を今まで数えきれない程見てきた。

沖田くんは：もう：

涙を流しながら話す沖田くんはあまりにも綺麗過ぎて、
俺の涙腺も緩む。

あんなに好き合っていたのに、最期と一緒に居れないなんてあんまりだ…残酷過ぎる…。

強がっているのか、いつものチャラついた口調で喋る沖田くんが余

計に悲しかった。

「……なアんで今なんだろうねエ……。俺が今まで仕事サボってばかりだったから……バチが当たったのかなア……それにしちゃ

酷い仕打ちだと思いやせんかい？俺が居なくなったら、土方さんまで悲しくなっちゃうでしょ？土方さんは関係ないのにね……。こんな事ならもっと働いて土方さんに迷惑かけねーようにしときゃ良かった……。この年で死ぬなんて親不孝ってモンですぜ……。近藤さんは俺のこと子供みてーにしてくれたから……泣いちゃうかな？ふふ、今のも冗談って事で……。俺が逝っちゃっても土方さん、泣きまくって仕事しなくなる……なんて事しちゃあダメですぜイ？アンタは真選組の副長なんだから……ちゃんと働かねエと……。これからは俺の分までねイ……俺ア「沖田くん、悪イがそりやテメーの口からちゃんと伝えてやらねーと……それこそ親不孝ってモンだぜ？」

俺は堪えきれず、沖田くんの言葉を遮って口を開いた。

「土方くん、まるでテメーの子供みてェにお前の事ばっかで…。ダメだぜ沖田くん…。オメーは」

こんなところで逝っていい奴じゃない。こんなところで死んじゃ……銀さんもさびしいんだけど」

すると沖田くんはゆっくり目を開けた。

「あり、旦那でしたかい

いや……気付きやせんでしたぜ……。恥ずかしいなア、あんなの1人でベラベラ喋って……。何で言ってくれねエんです……」

「この状況で言えるかよ……」

「はは、すいやせんね……。旦那……俺、旦那に会えて良かったよ。アంతは面白い。一手願いたかったんですけどね……。もう無理みて……」

「なア沖田くん、さっきから何弱気な事ばっか言ってるの？許さねエよ？死ぬなんて……。今までの元気はどこ行ったよ？なア……俺と一手やりたいんだろ？相手してやるよ。ちったア手加減もしてやらア……。だからよ」

「そうだ、万事屋の旦那」

今度は沖田くんが俺の言葉を遮った。

「万事屋のアンタに…コレが最後…一生のお願いでさア…。依頼料は土方さんにツケといてくだせエ…。依頼は…今の言葉全部…いや…できるだけいいや…それが無理ならこれだけでもいい…俺はアンタが好きだったって…伝えといてくだせエ…。あと…みんなにもよろしく言っというて…俺が居なくなったらからって泣きでもしたら…バズーカぶっ放すぞ…って…ねィ…。」

そう言い終わると、今まで流していた涙を急に止め、喋らなくなっ
た。

「最後なんて言うな…。沖田くん…？ねえ、沖田くんってば！？」

俺がガタツとイスから立ち上がり沖田くんを覗き込めば

沖田くんはコクツ…と俺の方に顔を傾かせ、まだ目尻に溜めていた
涙を一筋流した。

「そうだ、万事屋の旦那」

今度は沖田くんが俺の言葉を遮った。

「万事屋のアンタに…コレが最後…一生のお願いでさア…。依頼料は土方さんにツケといてくだせエ…。依頼は…今の言葉全部…いや…できるだけいいや…それが無理ならこれだけでもいい…俺はアンタが好きだったって…伝えといてくだせエ…。あと…みんなにもよろしく言っというて…俺が居なくなったからって泣きでもしたら…バズーカぶっ放すぞ…って…ねィ…。」

そう言い終わると、今まで流していた涙を急に止め、喋らなくなっ
た。

「最後なんて言うな…。沖田くん…？ねえ、沖田くんってば！？」

俺がガタツとイスから立ち上がり沖田くんを覗き込めば

沖田くんはコクツ…と俺の方に顔を傾かせ、まだ目尻に溜めていた
涙を一筋流した。

――
「副長！！沖田さんが……！！」

万事屋に総悟の見舞いを頼んだ日
俺はどうしても抜けられない会議だったけど、山崎の言葉を聞いたら、
そんなのお構いなしに体が勝手に動き、会議室を飛び出した。

” 沖田隊長が亡くなったそうです…… ”

走って病院へ向かいながら何度も頭の中で繰り返される、山崎の口から申し訳なさそうに発せられたその一文。

俺が今まで

一番恐れて、

一番聞きたくなくて、

一番認めたくない言葉。

走りながら携帯を見ると、「着信4件」と「新着Eメール1件」の表示。

着信は全部万事屋からだった。

嘘だ……と頭の中で考えていた総悟の「死」に現実味が出る。

メールを開く前に病院に着き、ポケットに携帯をしまい、階段を3階まで一気に駆け上がる。エレベーターは皮肉にも3階に止まっていた。

長い階段を上がり、

『心臓がなっているのは走った所為だ』

と自分に言い聞かせ、妙に落ち着きを取り戻し、廊下を歩く。

312号室――――

慣れたくはなかったけど通い慣れた筈のその部屋へ向かうのに、足が重い。

一番奥の個室。
ドアを開ける。

――カチャン――

「土方くん…」

中には万事屋と…総悟。

はっ、何だよ、いつもみてーに眠ってるだけじゃねえか、と、目の前の現実を否定しつつも、頭のどこかでこれが永遠の眠りだと分かっている俺は、なかなか足が進まない。

「何してんだよ土方!! 沖田くんずっとお前を…!! 早くこっち来てやれよ!!」

万事屋に怒鳴られてようやくハッと我に帰り、恐る恐る、一步一步

総悟に近付いていく。

万事屋の言い方は俺に、

まだ総悟は生きているんじゃないか

という淡い期待を抱かせた。

「……………」

だけど総悟は目を瞑ったまま、黙ったまま、動かない。
…当然だ。

でも、それが返ってこない事も、余計に虚しくなる事も知りながら、名前を呼ばずには居られなかった。

「総悟…？」

「……………」

返ってこないとは知っていた筈なのに。いつまで経っても返されない返事が悲しい。
ニツと悪戯に笑い、

『ははっ、実はドッキリでした土方さんビックリした？』

とでも言うんじゃないかと期待する程、それに比例して虚しさと悲しさが増していく。

「オイ総悟…いつまで寝てんだよ…？今日来れなかったのは謝るからよ……なァ…起きろよ…」

まだ頭がついていかず、どうにかして総悟の死を認めまいとしていた。
すると医者に来て

「沖田総悟さん…3月18日午後3時24分…死亡が確認されました。」

冷たく言い放たれた、総悟の死を確定する言葉。コイツにとっちゃ言い慣れた言葉だろうけど…
何言ってるんだ？意味分かんねーよ…
俺が一生懸命総悟の死を否定しようと頭の中であがいていると

「土方くん…」

万事屋が言いづらそうに口を開き沈黙を破った。

「……沖田くんからさ…依頼。受けてんだ。コレが最初で最後だろうな…。」

「依頼…？」

俺が訝しげに顔をしかめると

「ああ。俺が今日、お前の代わりに来ただろ？それを沖田くん、ずっとお前だと思って喋ってたんだ。」

そう言って、話し出す。

「俺…もうダメみたいだ…って…治すって言ったのに、迷惑ばかりかけて悪イって…。オメーはムカつく…気に喰わねエ…でも、オメーに好きって言って貰えて嬉しかった。オメーと一緒に居れて幸せだった。だけど、出来ればもう少しだけ…一緒に居たかったな…って…。『今死んでも悔いはねエかな…。あ、最後にキスしたかったかも。ははっ、冗談だ』って…沖田くん目エ瞑ったまま涙流してよ…。そのクセ笑いながら話すんだぜ…？もう俺…堪えらんねー

よ…」

そう言いながらも万事屋は時々声を震わせながらも、一言一言丁寧に話していく。

でも、最後まで言い終わらないうちに万事屋は病室から表情を見せないようにしながら出て行ってしまった。

本当堪えられなくなったのだろう。アイツのあんな表情^{かお}初めて見た。部屋を出る際に

「依頼料、オメーにツケられてんぞ。…パフエ奢りでチャラにしてやっから」

と、震える声をなんとか絞り出したような、そんな声で言った。

万事屋までもが泣いているのに、俺は涙の一粒も出ない：
なんて考えていると、気が付けば病室にはもう動かない総悟と：突
っ立った俺の二人。

とりあえず俺はベッドの隣のイスに腰掛ける。

「……………」

何の音もしない。

不思議なことに外の音すら聞こえない。

何をすればいいか分からず、ぼんやりと総悟の顔を見つめる。

……………可愛い……………

いつもと同じことを思う。

違うのはただ目の前に居るコイツだけ。

そしていつもと同じように携帯で時間を見る。

15..56……………

そう言えばメールがきてたな…

とメールを開くと、総悟からだった。

—————

土方さん仕事頑張ってね

それだけ。

そのたった一文だけだった。

だけど、総悟からメールが来たのは初めてで、最初で最後のこのメールにどんな意味が込められているのかなんて、俺には見当もつかなかった。

もしかしたら意味なんてなかったのかもしれない。

でもコレは、アイツから俺へと確かに送られた最後の言葉だった。

「何だよ…」

…俺の本音。

だって分かんねーよ…何だよ頑張れって…

『今すぐ来て』

とか言われた方がよっぽどマシだぜ……。何で…自分の事はいつも後回しで

俺のことばかり…。キツいのだって隠してよ…。

そんなくらい知ってんだよ…

何だよ最後の最後までよ…

それからふと、万事屋から聞いた総悟の言葉が蘇る。

『俺はアンタが好きだった』

思い出して、今頃になってようやく涙が溢れ出てきた。

「何がバズーカぶっ放すだ…みんな泣くに決まってるだろうよ…何だよ好きだったって…俺は今だって、これからだってずっと…お前が好きだぞ…？ホラ、俺泣いてるぜ？バズーカぶっ放すんだろ？いつまでそんな…早く起きろよ…万事屋ももう行ったぜ…？」

ここまできて往生際が悪いと思っても、こんな綺麗な顔してんのにコイツが死んでいるなんて思えなくて、想いだけが募ってくばかりで、ただ、総悟を抱き締めた。

細い身体…。

病院食は不味いっつって…いつも残してたな…。ちゃんと食わねエから…

：抱き締めた総悟とベッドの間にはまだ、ほんの僅かにぬくもりが残っていて、また虚しくなった。

少しの間そのまましていると、枕の下に何かあることに気付いた。片腕で総悟を抱いたまま、その何かを取る。

：総悟の携帯電話だった。

取って掴んだ時にボタンを押してしまったのか、画面が明るくなり、画面がくっきりと見えてしまった。

そこには俺宛のぎっしりと文字の詰まった

まだ送信されていないメールがあった。

総悟をまたベッドに寝かせ、悪いとは思ったがメールを見た。

土方さんへ

土方がこのメールを読んでいる時にはもう俺は生きてないと思います。

…なんてありきたりな出だしですけど、俺が生きてる間に見てたらぶっ殺す。死んでから見つけてくれなくても同じ運命にしますよ。まあ…見ちまっても、俺にバレなきゃ許してやります…特別にね。

なんでメールかというと、駄目なんです。手紙じゃ。何枚書いても涙が出てきやがって、涙でインクが滲んじまうんです。でもどうし

ても、俺が居た証を残しときたくて…。俺、いつからこんな泣き虫になったのかな？

土方さんがいつこれを見るかは分かんねーけど、近いうちに見ることになると思います。俺の予定ではね。もうすぐ居なくなると思うから…

「俺はそろそろ死ぬと思う」なんて言ったら、土方さん俺につきっきりになると思って。だから言わないけど、何で言わなかったんだ、なんて言わないでくださいね。何で気付いてやれなかったんだって自分を責めるのもし。だって俺隠してたんだからね。

俺は、今死んでも悔いはねえと思うんです。本当に。けども人間ってのはどうしてこうも欲深いのか、割り切ってるはずなのに、まだ一緒に居たいって思っちゃうんです。それで…俺も近藤さんみたいにトシって呼んでみたい…。…なんてね。ま、こんな事なかなか言えねえけど。

…長くなっちゃったな…

とりあえず、俺が居なくなっても、悲しくて泣いて仕事出来なくなるなんて事したら駄目ですよ？土方さんにはそんな心配いらねえと思うけど、アンタは俺らの副長だから、俺の分までちゃんと働いてね？まあ俺はいつもサボってたからあんま変わんねえと思うけど。

…まだまだ言いたい事たくさんあるけど

最後に、俺はアンタが大好きですよ。今までも、これからね…。好きだから、幸せになって欲しいんです。分かってくれますよね。

じゃあ、また。

右手は総悟の手を握り、左手でメールを見る。

読み終わってから、涙が止まらない。

総悟の言葉を残そうと送信ボタンを押せば、マナーにしていた携帯のバイブが病室に響いた。

万事屋から聞けなかった事もいろいろ書いてあって、総悟がこんな事を考えていたのかと思うと、アイツが言う通り、何で俺は気付いてやれなかったんだと、何もしてやれなかったと自分の無力さに腹が立ち唇を噛みしめる。

「総悟…っ」

無意識に名前を呼ぶ。

いつもなら弱々しくも握り返してくれるその手に、もう温かさはない。

「トシって呼んでみろよ…。お前なしに幸せなんかになれるかよ…」

……………だけど

総悟は俺の幸せを望んでくれたんだ
だから、今すぐには無理だろうけど
いつか総悟の分まで…

もう、現実逃避するのはやめよう。

総悟が一番辛かった筈だ。

「俺もまだ一緒に居たかった。俺はお前を愛してる…総悟。今まで
も、これからもずっとだ。……これで最後にするから…」

そう言って総悟を抱き締め、唇にキスをする。

総悟の頬とベッドのシーツに俺の涙が零れていく。

もう冷たくなった唇へのキスは、自分の唇の僅かな温かさだけを感じた。

「ありがとな、総悟」

そう言いもう一度だけ頬にキスを落とし、総悟をベッドに寝かせる。
もうベッドにも総悟にも、ぬくもりは残っていなかった。

終

———あとがき

いかがでしたでしょうか

中編の死ネタw

たくさんツツコミ所が
あったと思いますが：

そこはスルーして（ハ、△、＊）↑

コレは：

コレもみんなが

受験勉強で頑張っている時に

現実逃避で書いた痛作w

でもコレはまだマシ↑
というか

何故か悲しい話ばかり書く私（殴

人間性が出ているのだろうか？

だけでも

コレ読んで

泣いてくれた友達が居たんですよ

奇跡ですねww

やっぱり死んじゃったら

悲しいですもんねw

まア：そのうち明るい話かけたら
いいなと思いますw

読んでくれた貴方様
有り難う御座いました。

今だけ

白銀

原作銀魂で

たまがドット化した回の続きを妄想w

なんか白銀って…響きはいいのに↑

たまが白血球王の修復を終え、みんなが一段落した。

「コレで一件落着アルな!!」

「良かったですね、たまさん。白血球王さん。」

みんなが笑顔で喜んでいると、白血球王が徐に立ち上がる。

「コイツと少し話をさせて欲しい」

ご指名は銀時だった。

「…ンだよ、此処で話しいいじゃねェか。女々しーな。」

「いいじゃないか兄弟、男同時の話だ。頼みたい事がある。此処では言いにくい」

「……………」

「少し付き合っただけじゃないでしょうか銀時様。私からも願います。」

みんなの視線が銀時に集まる。

…別に断る理由もなかった。

「少しだけだからな。」

躊躇いつつも承諾した。

一体頼み事とは何なのだろうか？

「それでは、他の皆さんは私が元に戻しておきますので、用件が済み次第、白血球王、私を呼んでください。」

「ありがとうございます。たま様。」

白血球王が一礼し、ドット化したたまと他のみんなは、たまの体の外へと行ってしまった。

2人きりになる。

（一体コイツは何を考えてんだ？ たまのことか？ 俺のコピーとは言え…分かんねーな…）

少々気味が悪い。

相手に背を向け腕を組み考える……

…が、やっぱりたまの事以外思いつかない。

それに相手が黙ったままでは埒があかないので、振り向いて口を開いた…

「なア……」

その時

「頼み事ってな、ンっ…!？」

唇同士が触れる。銀時はそれが何なのかはすぐに気付いた。だが出来事が急過ぎて反応が遅れてしまい、驚きのあまりに体が固まる。

その間に白血球王は離れていった。

「…おっ…おまっ…何して…」

口元を手の甲で押さえて、しどろもどろに喋る。俯いているため相手の顔が見えない。

…というか見れない。

しばしの沈黙の後漸く、白血球王が沈黙を破った。

「何って…分からないのか？キ「いやいやいやいや！！分かってるよ！！分かってるから！！そういう意味じゃねエっての！！も、もうこのことについては触れないとする。コレで終わりにするからさ、うん。忘れるから」

銀時特有のふざけた口調で、俯いたまま目を泳がせながら、この妙な空気を誤魔化すように息継ぎもせずに喋った。そして相手の反応を見るため顔を上げる。

「……っ…」

自分と同じ顔だが、元からキリツとした目つきの相手の目が、あまりも真剣すぎて、目を逸らしてしまう。

「貴様はキスされて、それを無かった事にするのか？」

白血球王はじりじりと銀時に近づいていく。

「うん、する、っつーかしたい、っつーかせろ。させてくれ。」

「俺はふざけてこんな事はしない。兄弟、お前とはもう会えないかも知れないだろう？…無かった事にしても構わない…。だから少しだけ、俺に時間をくれないか…？」

「ン…な事言われても…」

素直な反応だった。

自分の周りではいつも奇想天外な出来事が起こっているが、これ程驚く事もなかなか無かった。まず、たまの体内にこんな街があった事自体驚きなのだが、自分と同じ顔の男に突然キスされる。

…普通有り得ることではないので、頭は混乱するし、それでも白血球王は銀時を見つめ続けている…。

銀時は正直、どうすればいいか分からなかった。

「いいだろう…？さっきの事は誰にも言わなかったらいい。俺も誰にも言わない。…いや、俺は言うことは出来ない。今だけで構わない…だから…」

話しながら銀時に近付き、抱き締めたまま言い終える。白血球王はあまりにも切ないような言い方で喋るものだから、銀時は断る事は出来なかった。

しかし、素直な反応は出来ても素直な態度にはなれず

「兄弟はキスなんかしねーぞ」とか

「手前と同じ顔によォ…」とか

文句ばかりを言うが、白血球王の腕を外そうとはしなかった。だから白血球王は、これはいいということだな、と解釈し、

「俺と同じで素直じゃないな」

と笑う。

「コピーなんだから仕方ないだろ」

と言いつをする銀時を、白血球王は可愛いと思った。銀時は、

『もう会えない』

そう思うと自分とは違って真面目で、たまのことを一途に護っていた白血球王に、少しだけ愛おしい…とは違うがそれに似た感情が生まれてきて、次第に心を許し始める。

そして心を許して頼み事やらを聞いてやろうと白血球王の言うまま、
されるがままに居ると

「ン…な事言われても…」

素直な反応だった。

自分の周りではいつも奇想天外な出来事が起こっているが、これ程驚く事もなかなか無かった。まず、たまの体内にこんな街があった事自体驚きなのだが、自分と同じ顔の男に突然キスされる。

：普通有り得ることではないので、頭は混乱するし、それでも白血球王は銀時を見つめ続けている…。

銀時は正直、どうすればいいか分からなかった。

「いいだろう…？さっきの事は誰にも言わなかったらいい。俺も誰にも言わない。…いや、俺は言うことは出来ない。今だけで構わない…だから…」

話しながら銀時に近付き、抱き締めたまま言い終える。白血球王はあまりにも切ないような言い方で喋るものだから、銀時は断る事は出来なかった。

しかし、素直な反応は出来ても素直な態度にはなれず

「兄弟はキスなんかしねーぞ」とか

「手前と同じ顔によォ…」とか

文句ばかりを言うが、白血球王の腕を外そうとはしなかった。だから白血球王は、これはいいということだな、と解釈し、

「俺と同じで素直じゃないな」

と笑う。

「コピーなんだから仕方ないだろ」

と言いつをする銀時を、白血球王は可愛いと思った。銀時は、

『もう会えない』

そう思うと自分とは違って真面目で、たまのことを一途に護っていた白血球王に、少しだけ愛おしい…とは違うがそれに似た感情が生まれてきて、次第に心を許し始める。

そして心を許して頼み事やらを聞いてやろうと白血球王の言うまま、
されるがままに居ると

「もっと声を出さないか」

「んっ…ふざけんな…あッ」

……………こうなっていた。

大方予想はついていたのだが、まさかたまの体の中にラブホテルまで完備されているとは…。

白血球王は銀時を気遣いながら、優しく抱いていった。始めこそ優しくかったものの、会ってから短時間の間に銀時対する感情は大きくなっていったので、行為は段々と激しいものとなっていた。

だが、銀時が（当然の反応ではあるだろうが）声を出したがるらないのを白血球王は良く思わず、一番上に至る、という訳だ。

「何故もつと声を出さない？」

「何故って…おま…馬鹿かっ」

喋って誤魔化そうとする銀時。

「馬鹿とは何だ…。もつと良くして欲しいと言っているのか？そうか、お前は素直じゃないから、遠回しにそう言っているんだな？」

「なっ…んで…そうなんだよ馬鹿っ…、…っああ、ちょ…っ、そこっ…やめろっ、ああんっ…あっ、やだ…っ」

もつと声をださせようと、態と銀時の前立腺を強く刺激する白血球王。

負けじと手で口を押さえ声を抑えようとするが、

「あんっ、あっ…ああっ…やっ……んっ」

結局それは叶わず

「んっ…んあああんっ……ッ」

声を上げて達してしまった。

「はぁ…はぁっ…も…最悪…」

『今だけだ、誰にも言わなければいい』

白血球王のその言葉と、一時的だと信じたい愛しさに似た感情があったとは言え、やはり羞恥は感じるものだった。

そして、白血球王の恥というものを知らないのかと言いたくなる発言。

「貴様…何が最悪だと言う？ 散々声を上げていたではないか。もしかして感じていなかったのか？」

「だからアッ！！何でそんな事言う訳！？ 恥ずかしーでしょーが；！！っつか声出させたのはテメーだったの！！！」

こんな具合で。

しかし、白血球王は至って真面目だったし、今しかないという思いから無意識に過激になっている事に気付いていなかった。

「出させたんじゃないか。：銀時、今だけで構わないからと、言っただろう？もうこんな事はしない…。本気で嫌なら止める。だが、少しでも気を許してくれたのなら、もう一度、もっとお前の声を聞かせて欲しい。：もちろん啼き声をな」

（最後のは余計だろ：
つーか：何で急に名前呼ぶ訳：？）

そう思ったが、またあの真剣な目で見つめられ、堪えられなくなる。

「分：かったから：あんま見んな：」

「もう一度してもいいと言う事だな？」

「2回も言わせんな：っ；！：あとっ、あんまがっつかないでくれる：？保たねェからよ：」

銀時なりに棘のない言葉でそう言うと、白血球王は微笑み、

「好きだ銀時：。」

銀時の額にキスを落とし、まだ挿れたままだったのでそのまま、ゆっくりと動き始める。

「あっ…んっ、んっ…」

「可愛い声だ…。」

白血球王は、銀時に頼まれた通り、ゆっくり腰を動かす。次第に銀時は小さく声を漏らし始める。

「ん…っ、んう…ふっ…はあ…」

だけど、やっぱり羞恥は捨てきれずに、銀時は顔を背け手の甲で口

元を押さえている為、くぐもったような声しか聞けなかった。

「んあ…っ、んんっ…」

口元を押さえ、しかも生理的なものか羞恥からか涙で目が潤んでいる銀時がどこかとても色っぽく、激しさが増しそうなのを何度も堪えながら、やっぱり声が聞きたいと思う白血球王は、銀時の手をやんわりと退かす。

銀時は一瞬目を見開いたが、抗いはしなかった。

「あっあっ…んっ…あん…」

「可愛い…。好きだ…銀時」

そう言っつて銀時の額に口付ける白血球王。銀時は目をキュッと瞑ったまま小さく喘ぐ。

完全に理性が飛んでしまわないように耐えていた白血球王だが、銀時はそれに気付いていた。

（今だけだからな…）

そう自分に言い聞かせ、白血球王の首に腕を回す。

「少しだけなら…んっ…もうちょい…きても大丈夫だから…あっ…がっつきは、すんなよ…」

そう言い相手の頭を引き寄せ、今度は唇に、銀時からキスをしてやる。

「…ッ！…あんまりそう可愛い事をしてくれるな…。我慢出来なくなるだろう」

そして、少しずつ腰の動きを速めていく。

「ああん…あっ…あん…」

銀時はまだ首に腕を回したままで、白血球王は耳元で喘がれ、たまらなかった。そしてまた少し、動きが激しくなる。

段々と銀時は果てへと近付いていく。

「んあっ…ああっ…も…だ、め…っ」

首に回した腕を背中へやり、しがみつくように抱き付く。

「ん…どうした？」

「あっ、もっ…イツちまつ…ああっ、はあん…っ」

それを聞き、白血球王は

「そうか、出していぞ」

急激に腰の動きを速める。

「いやっ…違っ…んっ、そ…じゃね…っ、あっ…いっ…しよに…っ、はあ…ッ」

「……………！だから…やめろと言っただろう？すまない銀時、我慢が

…利きそうに、ない…っ」

そして白血球王は最奥を強く突く。

「あああッ、ああっ…んああ…っ」

「そろそろ…出すぞ」

そう聞くと銀時は背中に回していた腕の指先にキュウっと力を込め、分かったと伝え

「……ん…ッッ」

「…くっ…」

2人は同時に果てた…のだが。

「あゝああッ、馬鹿ッ…やめろっ、ああっ」

「貴様が可愛い事を言ってくれるからだ」

銀時の可愛さにあてられた白血球王は、果てた後も律動をやめず尚も刺激を与え続け、果てたばかりの体には強すぎる刺激に銀時は背

中を仰け反らせ抗議の声を上げる。

が、そればかりはすんなり受け入れられる事はなく、その後も何度も2人は果て、行為が終わった時、銀時は疲れ切ってしまった。

「大丈夫か？銀時」

「はぁ…はぁ…」

どうやら大丈夫そうではなかった。

白血球王の気が済むまで及んだ行為に銀時はくたりとなり、浅く息をしながら弱々しく睨んだ。

「ふざけんなよ…やめろつつただろうが馬鹿が…こっちはテーマと同じ顔した奴に散々弄られて…只でさえ不快だったのに…何回やりゃあ気が済むんだ…俺のコピーがこんな盛ってたら、銀さんが発情期みたいじゃねエか…。ギャーギャーギャーギャーやかましい発情期は俺だって言いたいのかコノヤロー…」

恥ずかしさから減らず口を叩いてしまうが、白血球王は気にする事

なく答える。

「与えたのは不快感じゃなくて快感のつもりだったがな。あんなに可愛かったお前は何処に行ったんだ？」

「うるせエ…何が頼み事だ…ああもう腰は痛エし不快感たっぷりだし…だいたいみんなの銀さんを独り占めしてる時点で有り難く思っ
てくれないともう………」

「もう…？もう何だ銀時…？」

「……………」

よっぽど疲れていたのだろう、銀時は喋らなくなったと同時に眠り
に入ってしまった。

「眠ったか…。悪かった。少々度が過ぎたな。」

白血球王は、銀時と似て素直じゃない自分はきつと起きている相手
には謝る事は出来ないだろうからと、眠ってしまった相手を抱き締
めて一人こっそりと謝った。

その後に丁寧の後処理をして、きちんと着流しを着せてから、銀時
が起きるのを待った。

それから暫くして、銀時は起きた。

「…ん……………」

（アレ…俺寝てたのか…。ちゃんと服着せてある…。アイツか…。ん…？アイツ！？）」

銀時はガバッと起き上がる。

「いゝっ…てえ…」

腰の痛みが響き顔をしかめるが、すぐに辺りを見回し白血球王の姿を探す。

しかし彼の姿は見つからなかった。見つからないどころか、自分が今居る所はあのホテルではなかった。

「何処だ…？此処…。アイツは居ないのか…？」

銀時が居る場所は、白血球王の城の、白血球王が使う王室の、ベッドの上だった。銀時が起きる前にと、白血球王が連れて来たからだ。

白血球王が居ないことに、僅かながら銀時は不安を感じていた。その頃白血球王はというと、たまと話をしていた。

「たま様。お待たせ致しました。もう少して用件は終わります。城の外まで出てきたら、銀時をたま様達の所へ戻してやってください。」

それだけ伝えると、白血球王は銀時の元へと戻って行く。銀時との別れが近付いていることを示していた。

「何だ銀時、起きていたのか」

「……………！居なくなっちゃったのかと思った……………！！？（何言
ってんだ俺……）」

「寂しかったのか？」

態とらしく笑顔を見せながら聞いてくる白血球王に、銀時は

「ンな訳ねェだろ……」

と言いつ返すが、満更でもない様子で、ずっと白血球王を見つめていた。そして口を開く。

「つーかよオ…」

「何だ？」

「お前の頼み事ってやることだったのな」

「…別にいいだろう、俺がお前に何を頼もうと。許可してくれたのは他ならぬ貴様だ。…それに」

「それに？」

「『最近使っていない』と。言っていたではないか。」

「なっ!？」

「しっかり覚えている。よかったじゃないか、ドットのままではなかったぞ？」

「うるさいわアッ!!」

銀時は布団に潜り込み、ああもう恥ずかしいとかなんとかぶつぶつ呟いていたが、白血球王は銀時に近付いていき、こう言った。

「銀時、そろそろ時間だ。ずっと居る訳にはいかないからな…」

「……………」

正直、まだ居たいと思いい顔を布団から少しだけ覗かせて白血球王を見つめる銀時。こんな事して自分は餓鬼じゃないんだからと思うが、どうしようもなかった。

白血球王にいわゆるお姫様抱っこをされてベッドから出たが、自分で歩ける、と降ろしてもらった。城の外に向かいながら、白血球王は銀時に話す。

「出来ればもう少しお前と居たい。だが、この命は一度失ったと同然だ。たま様が助けてくださった命だ、もうこれ以上我が儘は出来ない。少しでも長くお前と居れたことで、もう充分だ。銀時、ありがとう。お前の腰、痛めさせてすまなかった…。」

最後だと思うと、自分が素直じゃないだとか、そんな事は関係が無く、言葉がすらすらと出てきた。

銀時の手を引きながら、城内の長い廊下を歩き、大きな扉を開けて城の外に出る。

「ここまでだ兄弟。俺のくだらない気持ちに付き合ってくれて嬉しかった。まさかこんなに好きになってしまうとは思わなかったが…。もう会えないならこんな事思っても仕方がないな。さあ銀時、目を瞑ってくれ。」

銀時と向き合って、相手の肩を持って目を見つめる。

「な…何だよ…ソレ…オメー…勝手過ぎるよ…勝手にやって勝手に好きだったって勝手お別れかよ？俺だってもう少しお前と」

銀時の言葉は最後まで紡がれる事なく、白血球王は銀時に顔を近付けて唇を重ね…反射的に銀時は目を瞑った。

「お前と居た……」

唇が離れて銀時が目を開けた時、そこにはもうドラゴンクエスト風のメルヘンチックな風景は無くて。銀時はスナックお登勢のカウンター席に座っていて。白血球王の姿も勿論無く、目の前に居るのは彼ではなくたまだった。

「……………」

銀時——俺——は状況が飲み込めなかった。

アイツは？何で此処に居るんだ？どうなったんだ？まだ最後まで話せてないじゃないか、と。

すると、たまの無機質な声が、まだあの世界に居るような俺の意識を引き戻した。

「ありがとうございます。銀時様。白血球王に無理に付き合っていたいで、彼も喜んでいたと思います。」

：そりゃ、初めは半ば無理矢理だったけど：俺はまだアイツに好きと：言ってるんだ。短時間の間にこんな気持ちが変わるなんておかしいかもしれないけど、確かにまだ一緒に居たいと：一方的過ぎだ。

俺がまだアイツのことを思っていると、その少女マンガのような回想は一気に崩れた。

「しかし、まさか銀時様からあのようなお声が出るものとは知りませんでした。」

「は？」

「白血球王は今まで私の体内の安全の為に尽くしてくれていたのですが、ウイルスと戦う姿しか見た事がなかったのですが、彼も男だった、ということですね。」

「オイオイオイ：何で知ってたんだよ！？」

「知っているも何も、私の体の中です。ポケットの中を覗くに過ぎません。」

「じゃあ：全部知ってるのか！？あの野郎誰にも言わねーって：！言ってるけどこんなのアリかよ！！」

「多目に見てあげてはもらえないでしょうか？」

「ふざけんじゃねエエッ！！生き恥だ生き恥ィッ！！あの偽者野郎今度会ったらぶっ殺してやるコノヤロオオッ！！」

——終

「……………」

銀時——俺——は状況が飲み込めなかった。

アイツは？ 何で此処に居るんだ？ どうなったんだ？ まだ最後まで話せてないじゃないか、と。

すると、たまの無機質な声が、まだあの世界に居るような俺の意識を引き戻した。

「ありがとうございますました銀時様。白血球王に無理に付き合っただだいて、彼も喜んでいたと思います。」

：そりゃ、初めは半ば無理矢理だったけど：俺はまだアイツに好きと：言ってねェんだ。短時間の間にこんな気持ちが変わるなんておかしいかもしれないけど、確かにまだ一緒に居たいと：一方的過ぎだ。

俺がまだアイツのことを思っていると、その少女マンガのような回想は一気に崩れた。

「しかし、まさか銀時様からあのようなお声が出るものとは知りま

せんでした。」

「は？」

「白血球王は今まで私の体内の安全の為に尽くしてくれていたので、ウイルスと戦う姿しか見た事がなかったのですが、彼も男だった、ということですね。」

「オイオイオイ…何で知ってんだよ!?!」

「知っているも何も、私の体の中です。ポケットの中を覗くに過ぎません。」

「じゃあ…全部知ってんのか!?!」

「はい、勿論です。」

「あの野郎誰にも言わねーって…!言っただけでこんなのアリかよ!?!」

「多目に見てあげてはもらえないでしょうか?」

「ふざけんじゃねエエツ!!生き恥だ生き恥イッ!!あの偽者野郎今度会ったらぶっ殺してやるコノヤロオオツ!!」

終

―――
あとがき

ごめんなさいごめんなさい
勝手過ぎる妄想で彼等を

穢してしまった：w w（殴

いろいろ突っ込み所があるのは
これはスルーでねw

多分たまは

お詫びに家賃1ヶ月分くらい
私の給料から払います

とか言ってくれそうですよねw

もちろん

彼等二人のあんな事やこんな事は
絶対に言わない筈ですけど

神楽ちゃんとか

さっきの話を聞いちゃってそうですよねw

っつーか作者の話は全部

駄作に変わりはないんですけど

話進むのが遅い↑

展開がノロノロ↑

分かってるけど

変えられないp（（、q

仕方が無いのさ

人間性がねちっこいから（殴

銀時29巻見てないと分からない所が
ちよくちよくあったと思います

白血球王の口調とか全然だったと
思いますけど

とりあえず

読んでくださったなら

とても嬉しいです（＊＾ω＾＊）

ありがとうございました／（＾O＾）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9860m/>

銀色妄想

2010年10月10日15時51分発行